

J. オッフエンバック 《ホフマン物語》 ヒロイン研究

— 1 人全役の可能性を探る —

A Study of Heroines in “Les Contes d’Hoffmann” by J. Offenbach

— Possibility of One Soprano Singing All Heroines —

本論文は、ジャック・オッフエンバック Jacques Offenbach (1819-1880) による未完の遺作、オペラ《ホフマン物語 Les Contes d’Hoffmann》(1881) を研究対象とし、作品の成立史や上演史、エディション研究、特に近年の新・批判校訂版のうち代表的なものである「ケイ&ケック版 (2005)」に集積されている知見などを用いて、ヒロインを 1 人で歌い演じることを目指すという立場から、このテーマについて論じるものである。

本作品の 4 つのヒロインには、複雑な設定——ステッラという 1 人の女性の異なる現れ方として、オランピア、アントニア、ジュリエッタという 3 役が存在する——が与えられており、作曲者は、これらを全て 1 人のソプラノ歌手に歌わせる構想をもって作曲した。しかし、初演（作曲者の死後、1881 年 2 月 10 日）においてはこれが実現されたものの、彼の死から初演までに起きたさまざまな問題や、初演後数年間の不運な出来事を主な原因として、すぐに、その上演形態に取って変わる新たな形態——ヒロインを、1 役ずつ異なる歌手が担当する——が主流となった。そしてその後、複雑な上演史、エディション史を経て 20 世紀末に研究が大幅に進展すると、ようやく新・批判校訂版が登場し、これに呼応するように、近年「ヒロイン 1 人全役」形態の上演は徐々に復活をみせている。

単なるオムニバス形式ではない本作品において、ヒロイン役の上演形態は、作品解釈、ドラマの本質に大きくかかわる問題であるが、不可解なことに、先行研究ではこの問題に正面から取り組んだものはみられない。そこで本論文では、ソプラノの歌手という立場から、実現の可能性を含め、「ヒロイン 1 人全役」形態のもつ意義を検討する。

本論文は 2 部構成をとり、主に、第 1 部「《ホフマン物語》上演及び解釈の可能性 — 「開かれた作品」として —」では現状の把握を、第 2 部「ヒロイン「1 人全役」の歌唱に向けて — 膨大な可能性の中からの選択 —」では、実践（歌唱）に向けての考察および提案を行う。

第1部は第1章、第2章から構成される。第1章では、本作品における上演の現状と新・批判校訂版の解説を行いながら、これらの版が示す立場、またそれに対して筆者が取る姿勢を明らかにする。新・批判校訂版は、研究の進展という点で従来の版から格段な進化を遂げ、本作品の可能性を大きく広げたものである。作曲者自身による未知の譜面が多数掲載されたことで、彼が特定の曲について複数のヴァージョンを作曲していた事実なども明らかになった。制作者の1人であるケックは「自分の仕事は可能性を提示することで、そのなかから制作者の選ぶことが望まれる」との見解を示しており、実際に新・批判校訂版では、従来版とは異なり、多数の選択肢を並列に提示する方法が選択されている。また、ケイとケックは現在もエディション研究を続けている。こうした状況からは、イタリアの記号論学者ウンベルト・エーコの提唱した「開かれた作品 *Opera aperta*」という概念が想起される。しかし、選択肢が増えるということは、そのぶん選択に際しての手掛かりが必要になるということでもある。根拠をもって作品を演奏、提示するためには、譜面以外からも情報収集と考察を行う必要がある。

続いて、新版の台頭によって変化をみせているヒロインの上演形態を客観的なデータから解析し、新版を使用した公演において「ヒロイン1人全役」あるいは少なくとも2役以上のヒロインを1人のソプラノが担当した事例が役半数にもものぼることを確認する。ただし、これらの因果関係からは、新版が「ヒロイン1人全役」を推奨しているかのような印象をうけるが、実際にはそのような事実は見当たらず、作曲者オッフェンバックが目指していた上演形態を楽曲の復元に即して我々が自然な形で追うようになった——このように捉えるのが自然なものと考えられる。

このほか、ケイ&ケック版におけるヒロイン役の譜面上の変化を考察すると共に、公演評にも着目し、新版の評価を追いながら、筆者自身の立場を明らかにする。

第2章では、ヒロインに着目してエディション史を丹念に追うことで、各エディションの特徴、相違点を浮き彫りにすると共に、それにもとづき、ヒロイン像が現代までの間に遂げた変化を考察する。この結果、新版制作以前にも、作曲者の意図に近付こうとするなかで「ヒロイン1人全役」形態を復活させようとする動きは多少あったものの、定着には至らなかったことが確認できる。

第2部は、第3章、第4章、第5章から構成される。第3章では、ヒロインを1人の歌手に担当させるという作曲者の意図を支持することの、あるいは「ヒロイン三位一体」設定の妥当性を探るため、同名原作戯曲と、戯曲の素材作品である E.T.A.ホフマンの諸作品、

あるいは彼自身に焦点をあてる。まず各作品の関係を整理したうえで、戯曲の制作された理由を検討する。この考察からは、E.T.A.ホフマンが当時フランスでブームになった理由を、フランスでは彼自身に過度なイメージが付いていた点にみることができる。台本作者であるフランス人のバルビエとカレは、これを生かす形で戯曲『ホフマン物語』を制作したものと考えられる。続いて、E.T.A.ホフマン自身のエピソードと彼の著作に立ち返り、《ホフマン物語》に反映されている要素を検討する。ここでは、E.T.A.ホフマンが著作内のヒロインたちに、最愛の女性ユーリア・マルクの姿を投影していたこと、つまり《ホフマン物語》ヒロインの元々のモデルがユーリアであることが明らかになるが、同時に、「三位一体」設定については、彼自身が、ユーリアに出会う前、違う女性との恋愛のなかで「3人の女性が1人の想い人に集約されていく様子」を体験していたことが発見される。この発見により、本作品のヒロインの特殊な設定は、制作者による創意工夫ではなく、彼自身のエピソードにもとづくものであったと推測される。さらに、彼自身の持つ多面性にも着目し、その多面性が彼の幻想世界でのユーリアの多面性に、さらにはいえば本作品のヒロインのもつ多面性に影響を与えたのではないかとの見解を示す。以上より、ヒロインの「三位一体」設定は本作品誕生における基盤であり前提であったといえる。また、本作品には「三位一体」設定を持つキャラクターが他にも2つ存在し、それらも「1人全役」形態を前提とするものであるが、これらのキャラクターは原作戯曲の初演から現在まで、その前提が崩れていない。これらの役との等しさという点からも、ヒロインは「1人全役」の形態を目指すべきである。

第4章では、初演歌手がヒロイン役にもたらしたものについて考察する。まず初演までの過程を追い、本作品のヒロインの譜面がヒロイン初演歌手の相次ぐ変更によって難易度のより高いものになった事実を確認する。さらに最終的な初演歌手アデル・イザークに着目し、本作品以外からも彼女の声、歌唱を調査することで、ヒロインに求められる歌唱を検討する。E.シャブリエによるオペラ《いやいやながら王にされ》で彼女が創唱したミンカ役の譜面からは、彼女が超人的なコロラトゥーラの技巧と共に、深く豊かで抒情的な音色も併せもっていたことが推察される。

第5章では、バルビエとカレ、そしてオッフエンバックが与えた、あるいは目指したヒロインごとの個性を検証し、歌い手としての立場からコロラトゥーラ・ソプラノへの「1人全役」形態に向けた提案を行う。まずは台本から、ホフマンの幻想世界での3人のヒロインにみられる個性を検討する。ここで筆者は、ヒロインが幕ごとに成長しているのでは

ないかという見解を示す。ホフマンの幻想世界でのヒロインの成長とは、つまりホフマン自身の成長を指すのではないだろうか。これまで本作品は上演において制作者らの意図した幕順を歪めることが頻繁にあったが、ホフマンの成長が描かれているのであれば、そうした幕順の変更は、ストーリーを歪めるという点からも行うべきではない。

続いて、オッフェンバックが音楽のなかで行った描き分けを検討するため、楽曲分析を行う。アリアを取り上げ、オーケストレーションや歌手に与えられたメロディーから、各ヒロインに求められる声質を調査する。これにより、演奏者の工夫以前に、オッフェンバックは譜面のなかで各ヒロインの描き分けを行っていたことが明らかにされる。そしてそれらを踏まえ、「統一性」という言葉に着目する。「3つの現れ方をもつ1人のヒロイン」という構図からは、ヒロインは統一性のなかで個性をみせる必要があるものと考えられるからである。ただし、ヒロインの統一性はすでに、素材作品の作者、モデルとなった人物、作曲者の同一性などから、作品におのずから潜むものと考えられる。「ヒロイン1人全役」の形態においては、歌手の同一性までもが加わる。これらのことから、ヒロイン役を1人で担当する場合には、統一性ではなくむしろその差異を示すことに注力すべきであるとの見解が導き出せる。

さらに、歌手の立場から、コロラトゥーラ・ソプラノに向けた「1人全役」形態への提案を行う。ここではオランピアとジュリエッタのアリアについて考察をおこなう。オランピアのアリアに関しては、19世紀に初演された本作品を130年以上経った今日演奏するということを考慮し、我々が演奏を行うにあたってのヒントを得るためには、装飾における演奏習慣の変化を追うことが望まれる。この分野に関してはさらなる研究が望まれるが、現時点では研究ノートとしてこのアリアにおける一装飾例を付録に掲載することで、装飾の提案に変える。

最後に、結論としてここまで述べてきた情報を整理する。作曲者オッフェンバックがそれを望んだという根拠を遥かに超えて、本作品には「ヒロイン1人全役」形態を支持する妥当性が存在し、この形態を選択することで本作品はその本質に近づくことができる、との見解を示す。